

週日の説教

金 大烈 神父 2010年10月6日(水)

《祈りには“望む心”が必要です》

主の平和

今日の福音(ルカ 11・1-4)は、ご存知のように私達が毎ミサで捧げている「主の祈り」についての話です。

さあ、今日はこの「主の祈り」を教えたイエス様のみ心と、「祈り方を教えて下さい。」と言ったその弟子達の心を推し量ってみましょう。

聖書を読んでみますと、全般的にイエス様がよく祈られた姿が書かれています。山の中で祈られ、奇跡とか色々な癒しを行ってから、また群集から離れたちょっと静かな所で、祈られたイエス様の姿が現されています。しかし、面白いのは一回もイエス様が弟子達に「祈りなさい」とか、そして「これが祈り、祈り方だ」とか、教えた場面は全く出てきません。

結局今日、弟子達の方からイエス様に「洗礼者ヨハネはその弟子達に祈り方を教えたのですが、先生は私達に教えてはくれないのでしょうか、教えて下さい。」と逆に頼む形になっています。これはイエス様の一つの教育の方法でしょうか。とにかく弟子達が先に「教えて下さい。」と話しかけたわけです。そして、その後ただ一つの祈り、亡くなられる前に教えられたただ一つの祈りが「主の祈り」です。そして、この「主の祈り」は2000年経っている今でも、クリスチャンだったら全部身につけて覚えている祈りであることを私達は解っています。

さあ皆様、祈るために何が一番必要でしょうか。皆様は祈りの生活を上手くなさっていらっしゃるのでしょうか。よく祈られますか？

祈りの生活をよくなさっている方もいらっしゃるでしょうが、「なかなか祈りに集中出来ないのです。」というのが殆どの私達の姿ではないかと思えます。

それでは祈りのために何が一番必要でしょうか。祈りを上手くするためには何が一番必要でしょうか。(誰からも反応がなく司祭が苦笑した)

祈りには“願うところ”がなくてははいけません。結局必要性です。ということは“望み”です。

“望む心”がなかったら絶対祈りは出来ません。祈りたい気持がなかったら絶対祈りは出来ません。何十年信仰の生活をして、祈りたい気持がなかったら、実際に祈りは許されてないことだと思います。

皆様、このミサに与っていますよね。ミサに与りたくて来られたのでしょうか。今日のミサは義務ではありませんね。しかし、与りたくてこちらに来られたわけです。そして、一緒にミサを捧げていることです。祈りも全く同じです。祈りも“祈りたい”そういう気持がなかったら絶対出来ません。

もちろん私は、「祈りましょう。祈らなければならないです。」とよく皆様に話して来ました。それは義務的に習慣として、習うこと、練習がいつも必要なのが祈りであることも確かなことだからです。

しかし、前に進もうとすれば何よりも“望み”が必要です。それではその“望み”はいつ生じるのでしょうか。いつ祈りたい気持ちになるのでしょうか。満腹している時は祈ろうとしても眠くなります。ということは、私は何の問題も抱えていない、何の不便さも感じていない場合には、やっぱり神様を忘れてしまいます。しかし、色々な困難、試練、色々な痛みを感じている時にはやっぱり“願うところ”が生じます。「ああ、これは祈らなければならない。自分の能力では何も出来ない。どうすればいいか、願いましょう。」という気持ちになるわけです。

ある意味では人間的な表現での、幸せは幸せではありません。逆に試練は試練ではありません。痛みがあるからこそ私達は祈ることが出来ます。“望み”が生じます。ある意味で、私達がこのような痛みのうちにいることを感謝しなければならないことは、このような面で理解しなければなりません。

皆様お腹一杯になっている時には“願うところ”がありませんね。しかし、「何か入れなければならない、満たさなければならない。なぜこんなに不便なのか、痛いのか。」そういう環境に生きる人がやっぱり神様に耳を傾ける、その心を許されることをもう一回考えてみましょう。

皆様、祈ろうとすればまず何を祈るべきか、それを思い出して下さい。必ず皆様が“願うところ”が現れます。そうしたら「祈りたい、祈りたい」そういうところまで至ると私は確信します。

ありがとうございました。